

## 黒いドレスと白いバラ



21世紀職業財団  
会長 岩田喜美枝

ファッションの話ではない。セクシュアルハラスメントについてである。世界ではセクシュアルハラスメントに対する抗議と被害者への支援の動きが広がっている。そのきっかけを作ったのは昨年秋、アメリカでの大物映画プロデューサーに対する告発であった。1月に開催された映画賞「ゴールデン・グローブ賞」の授賞式では多くの女優が黒いドレスを着用し、また、音楽賞「グラミー賞」の授賞式ではミュージシャンが白いバラを身につけて、セクシュアルハラスメントに対し抗議の意思表示をした。こうした著名人たちだけではなく、一般の女性達もネット上で#MeTooと、性暴力やハラスメントの被害を世界中で訴えている。

日本国内はどうか。ジャーナリストの伊藤詩織さん、作家・ブロガーのはちゅうさんらが声を上げたが、あまり広がりを見せていない。そんなことを荒立てるのは大人気ないと被害者に冷たい社会、被害者でありながら恥ずかしいことと思う女性側の意識、組織の中で起こった場合は訴えると組織から排除されるのではないかという懸念、これらが壁になって声に出せない人が多いのではないか。

私も自分の経験をこれまで語ったことはなかった。10

代の昼間、下校途中に通り返りの男性にされたこと、国家公務員全省庁合同採用研修で防衛庁の同期生にされたこと、20代に残業帰りの一人夜道で起こったこと、20代から30代にかけて通勤電車で経験した痴漢被害、40代で懇親会からの帰りのタクシーの中で労働省の後輩管理職からされたこと。これらが起きた時の不快感や恐怖感は何十年たっても忘れられない。幸いなことに、職場の上司、先輩からハラスメントを受けたことは一度もない。

残念ながら世界ではセクシュアルハラスメントはまだまだあることが今回の運動で明るみに出た。被害を受けた女性達には、自分の身を守るため、また、被害を拡大させないために、家族、友人、職場の同僚・先輩・上司などに相談したり、相談窓口へ訴えたりしてほしい。企業経営者には、ハラスメントは許さないという方針を明確にし、また、加害者は無自覚の中で起こすことが多いためハラスメント防止のための研修を定期的実施していただきたい。仮に被害が発生した場合には、被害者が安心して相談できるよう、相談窓口へ専門性の高い相談員を配置するとともに、個人情報秘匿することや相談による不利益は一切ないことを厳守していただきたい。